

ドイツの教科書に見る戦後日本像の変遷

上野 隆生*

The Changing Image of Postwar Japan in German Textbooks

Takao UENO

Even since World War II, Japan has often been compared with Germany, perhaps because of the reconstruction and rapid economic growth in both countries. The central aim of this article is to describe what kind of image Germans held of postwar Japan. For this purpose, I will review various images of Japan in German textbooks of geography and analyze the transition of such images, if any. The “postwar period” in this article means the period from 1945 to the late 1970s, which equals one generation.

In the first phase, from 1945 to 1960, the descriptions and images of geography textbooks were almost the same as those before the war. From the European or German point of view, traditional Japanese things and ways of living, as well as architecture, seemed to be very interesting because of their “myst

* うえの・たかお：敬愛大学国際学部助教授 近代日本外交思想史

Associate Professor of Modern Japanese History, Faculty of International Studies, Keiai University; history of ideas in Japanese diplomacy.

eriousness.” Although Japan had successfully developed owing to the German “model,” both things Japanese and Western formed a “well-balance” scene of Japan.

In the period of high economic growth in the 1960s, German textbooks focused on the Japanese economy and industry, depicting the low-price materials made in Japan and how widely and rapidly Japanese goods were penetrating into foreign markets. But they interpreted the reason for Japan’s economic success rather simply, for it was often stated that because of the national character, such as “diligent,” “decent,” and so forth, Japanese industry could easily employ cheap labor, which enabled it to produce relatively cheaply.

In the 1960s and 1970s, however, a transition took place in Japanese society, and the two aspects of “tradition” and “progress” came to be not so interestingly combined as before. Japan itself faced serious problems in this third period. It was at this juncture that German textbooks began to interpret Japanese society and the economic system comprehensively and structurally. In addition to national character, the social behavior of Japanese people in the corporate system, social security, environmental problems, and many other topics were described in detail. It can be said that the stereotyped image of Japan, which continued from before the war, or even from the last century, had come to an end.

はじめに

日本とドイツは、第二次世界大戦後の道程についてもしばしば対比される。敗戦と経済的復興などの点では共通項があるものの、戦後補償と戦争責任、戦後の憲法体制、分断国家としての経験の有無、など対照的な要素も多い。戦後のドイツからみると、同時代の日本はどのように映っていたのだろうか。

「戦後」をどう定義するかは議論のあるところであろうが、本稿では1世代=30年というスケールを適用し、1940年代後半から70年代後半までを「戦後」として扱うことにする。このような時期の設定は必ずしも便宜的

表1 産業別人口の日独比較

(単位 %)

	日本			西ドイツ		
	第1次産業	第2次産業	第3次産業	第1次産業	第2次産業	第3次産業
1950年	48.3	21.9	29.7	23.2	42.2	32.4
1960年	32.6	29.2	38.2	13.4	47.9	38.6
1970年	10.9	34.1	46.5	7.5	47.3	45.2

(資料) 矢野恒太記念会編『数字でみる日本の100年』改訂第三版, 国勢社, 1994年, 83ページより作成。

なものではない。この時期、特に50年代後半から70年代初めにかけての日本経済の大変動ぶりは、日本国内でも従来から指摘されてきた⁽¹⁾。たとえば、日本と西ドイツ(当時)の産業別人口の変化を1950年から10年ごとに概観すると表1のようになる。戦後の日本では第1次産業から第3次産業への移行が急速に進行していることがわかる。このような変化は、ドイツの教科書の叙述にも反映されているだろうことが予想される。

本稿では、ギムナージウム用第7・8学年向け(日本の学校制度でいえば中学校に相当)の地理教科書を中心に取り上げる。この学年の地理教科書を材料とするのは、この学年で外国地理を学習することになっており(東西ドイツではほぼ同様)⁽²⁾、地理教科書には同時代的なイメージが盛り込まれている可能性が高いからである。もちろん、ドイツの学校制度が日本のそれとは大きく異なるとともに、教育に関して各州の独立性が高いことなどから、カリキュラムや学校制度自体についても詳細な検討をする必要があるのはいうまでもない⁽³⁾。だがそれらの諸点に関しては別の機会に譲ることとし、本稿ではあくまでも標本抽出的にいくつかの地理教科書を通して日本イメージの変遷をみることを主眼にしたい。その意味で本稿は、19世紀後半からアジア・太平洋戦争までの時期を扱った拙稿「ドイツの教科書にみる近代日本像の変遷」⁽⁴⁾の続編にあたるものである。

1. 敗戦後の日本

本節では1940年代後半から50年代の日本イメージを検討する。

戦後まもなく出版されたギュンデルほか『ヴェスターマン・ギムナージウム用地理』（1948年、ギムナージウム低学年向け）は、紙質も悪く、121ページの小冊子だが、世界旅行をする設定で各地の様子が旅行記風に描かれ、3ページ余りが日本の記述にあてられている⁽⁵⁾。シベリア鉄道を経由して郵船で敦賀に着き、琵琶湖近辺のホテルに宿泊、奈良・大阪へも足を延ばして鉄道で東京へ向かうという旅程をとり、日本の家屋の様子や京都の伝統工芸なども紹介している。このほか、関東大震災以後、東京は「近代的な欧米スタイル」に再建されたとか、都市部の商業地では公務員・店員・会社員などは洋服を着ており、着物は在宅時に着る程度であるとか、の記述がある程度で、全体としては表面的な内容といわざるをえない⁽⁶⁾。また、1947年に出され、49年に再版された『地理教科書』⁽⁷⁾は、31年に出された教科書を写真なども含めてほとんどそのまま印刷したものであった。もっとも、「今日の日本に特徴的なのは古き日本とヨーロッパの要素との混合である。古いものと新しいものが幾重にも、余りにも唐突に、重なり合っているので、『並存の国』といっている」⁽⁸⁾という指摘は種々表現を変えるものの、これ以後の教科書でもしばしば登場することになる。

東西ドイツ分断の1949年に出された『世界一見 地理読本 非ヨーロッパ地域』⁽⁹⁾には、地震の多さなどの地勢上の特色に加えて、勤勉さ・粘り強さ・忍耐強さ・礼儀正しさといった国民性に関する記述がみられる。また、「日本人はすべてのヨーロッパの進歩を習得しようと努めている」とも指摘している。さらに産業面では、耕地面積の狭隘さ、米・小麦・トウモロコシ・豆・茶などを産するほか、養蚕業が盛んで陶器などの諸技術に熟練している点を記している。「日本の土地は、石炭、銅、鉛、金、酸化アルミニウム、石油を埋蔵している」が、「それでも日本は実に多くの加工原料を輸入しなければならない」⁽¹⁰⁾という件も含めて、戦前の記述を踏襲している傾向が強い。しかも「満州」および朝鮮がいまだに日本の領土であるかのごとき記述をしているという驚くべき事実誤認もある。前者は地下資源の供給地として、後者は食糧供給地であるとともに日本製品の市場として、それぞれ重要であるとしている⁽¹¹⁾。明らかに戦前の情報をそ

のまま記述しており、日本および朝鮮や中国に関する情報の少なさを物語っている。

1950年代に入ると、記述量全体も増加してくる。1950年版のペーメ『地理教科書』をみてみよう⁽¹²⁾。第二次世界大戦後の領域の変更について、台湾は中国に、クリル諸島とサハリンはソ連に、それぞれ帰属が認められたと記述されている（琉球が中国に帰属するという誤りはあるが）。日本人については、「小さく、活発で、機敏にみえる。すばやく理解する力があり、勤勉で、辛抱強く、嬉々として進取の気性に富んでいる。……日本人はその古い習俗を放棄することなく、すばやく外国の風俗習慣を採り入れた。洋服を着ている大店の商人が家では着物を着て、古来の作法で茶を飲むのは全くよくあることだ」と述べ⁽¹³⁾、「年長者と故郷への忠誠に対する尊崇の念は日本人の生活様式の根底を成している」としている⁽¹⁴⁾。農地改革以後の状況は記述されておらず、農民の多くが「負債を抱えた小作人として祖先の地所に生きている。……農民はいまや土地改革法によって抑圧する借金の重みから解放されるべきである」と記されている⁽¹⁵⁾。このほか「一世紀のうちに農業国から技術的・文化的に高度に発達した国になった」として、繊維・日用品・自転車・自動車・金属製品・陶器・和紙などの製品が製造され遠隔地にまで販売されていること、それとともに移民や入植、造船・海運業が盛んになったことを述べているが、いずれも戦前の叙述と同趣旨である。わずかに「政府もまた領域拡大に努めた。その結果生じた対外膨張への衝動は、先般の戦争によって抑制され、日本の大国としての地位は著しく制限された」という叙述が目新しい。また、日本製品が安価な理由について、「つねに満足しているとはいえないが、わずかな給金で日本人の労働者たちはつましく生活しているため、製造価格は欧米諸国に比べて低く抑えられている」と説明している。さらに、東京の様子が次のように描かれている。かたや緑に囲まれた大きな平屋が静かに建っているかと思えば、かたやあらゆる様式の高層建築がひしめき、「伝統的な日本の様式の茶店の隣にはダンスバーがあり」、乱暴に走る自動車やバイクの一方で、「リキシャ」や「坊さんが静かに落ち着いて、尺八を吹きながら托

鉢している」⁽¹⁶⁾。人力車や虚無僧の托鉢はさておき、近代的な要素と古来からの要素との混在ぶりはよく示されている。

次にヒンリックスの教科書を取り上げてみよう。『第7－8学年の地理、地球』には1953年版・55年版があるが、内容は全く同一である⁽¹⁷⁾。本書は、政治経済よりも国民性や文化風習のほうに力点を置いた叙述をしている。そのため、「鎮国」の時期以降「日本人は自然と密接に不可分に融合した。それで、独特の統一的で高度な文化が生まれた。家とインテリアがそれを示している」という指摘も見受けられ、床の間など日本家屋の様子も詳しく記されている⁽¹⁸⁾。同じくヒンリックスの『地理』は何度か版を重ねているが、1950年代ではその記述内容に大きな変化はみられない。51年版・52年版・57年版はいずれも同一内容で、文章表現などは違うものの、『第7－8学年の地理、地球』と同趣旨の記述内容となっている⁽¹⁹⁾。写真も牛馬耕の様子、地震の亀裂、入江の風景など、基本的に戦前の教科書類に掲載されていた写真と同じものが載せられている。

写真という点では、『地理の光景』が比較的豊富に掲載している。1952年版と54年版では若干写真の変更がみられる。57年版もあるが、こちらは54年版からの変更はない。いずれの版も全90ページ前後で、そのうち20ページほどが日本の記述に割かれている⁽²⁰⁾。旅行記風の叙述スタイルで始まり、日本家屋や生活の様子が茶店と芸者の記述や挿し絵などを入れて比較的詳細になされている⁽²¹⁾。「我々ヨーロッパ人にとっては、『謎めいたアジア的微笑み』はいまでも不可解である」⁽²²⁾ という指摘は印象的である。また、教育制度への言及に加えて、習字の授業時間の風景写真を掲載している点も面白い。この写真はこれ以後の教科書にも転載されている⁽²³⁾。このほか、女性は大抵今でも、外国の新しい流行の服装よりも地味な綿の着物が見事な絹の着物を着たほうが良いと思っていること、少ない耕地と不足する地下資源にもかかわらず、勤勉な労働によって、安価な輸出製品を製造し、それによって必要な輸入を賄えること、そのような基本構造は戦前と同様だが、現在は一層複雑で困難な課題に直面していること、などを述べている⁽²⁴⁾。

この時期の他書でも、山がちな地形で耕地率が低く、小規模農業経営であること、人口増加率の高さと失業者の多さ、原料の不足から輸入に頼るとともに、低賃金ゆえに低価格で製品を作ることが可能で、その結果安価な製品を輸出していること、などはしばしば指摘されている⁽²⁵⁾。それらの中で、1952年版の『世界地理教本』⁽²⁶⁾は、日本にとっての外国貿易の重要性を記すとともに、日本の資本欠乏が経済再建の妨げとなっているとして、以下のような具体的叙述をし、中国・東南アジアの市場価値を指摘している。

生存可能であるためには、輸出が今日のおおよそ倍にならないとならなければならない。しかし、そのためには外国から原料を大量に購入するだけではなく、戦争によって失われた販路〔中国大陸や東南アジアをさす——引用者注、以下同様〕を回復しなければならないだろう。たしかに日本の工場製品は労賃の低さゆえに実に廉価ではあるが、貨物運賃を安く輸送できるのは、中国や東南アジアだけである。しかし、この地域は現在日本との貿易を閉ざしている⁽²⁷⁾。

また、第二次世界大戦後「四つの主要な島に領土が減少し、アメリカの手本にしたがって、民主主義的基礎の上に国家体制をあらたに構築した」ことなどを述べ、「1951年に締結された西側諸国との講和条約後も、完全に武装解除されたこの国を外国の攻撃から守るためにアメリカの占領軍はそのまま駐留している。それによって、日本はアメリカの政治的軍事的勢力範囲に組み込まれている」と述べている⁽²⁸⁾。

アメリカとの軍事同盟については、ドイツ民主共和国の教科書もみておきたい。1953年の『第7学年用地理教本』⁽²⁹⁾は、次のように記している。

アメリカ帝国主義者らは、日本の大資本家たちと結託し、彼らと特別協定を結び、「平和協定」と呼んでいる。アメリカの戦争屋は、日本の島々の上に東アジアへの侵略戦争のための基地を設置し、日本から朝鮮を襲撃した。日本国民は以前よりもさらに大きな貧困状態に沈んだ。アメリカの戦争屋は、日本の軍事産業を取り除かずに平和産業の重要な部分を除去した。……特別協定は日本国民に熱望する平和をも

たらしなかった。そこで、ますます多くの大衆が日本共産党の周りに集まっており、何百万人もの日本人が外国や自国の抑圧者に対するストライキやデモに参加している⁽³⁰⁾。

多くの失業者（1952年に1,000万人としている）、地下資源の乏しさ、原料の輸入と機械・自動車・鉄鋼・造船などの工業と養蚕・繊維産業が盛んであること、低賃金ゆえに低価格で外国に供給しても大きな利益を得ていること、などを紹介している⁽³¹⁾。

戦前からのスタンダードな教科書である『ザイドリッツ』では、どのような記述がみられるのだろうか。1954年版では、第3部（アジア）で約9ページが日本の記述にあてられており、写真も、風景や女性の着物姿のほか、工場や東京・大阪の中心部の模様などを示すものが掲載されている⁽³²⁾。地勢・自然環境に関する叙述が詳しいのは『ザイドリッツ』の特色でもあろうが、産業・歴史・都市の景観など多岐にわたって記述している。まず、「日本の耕地は庭にも等しい」と耕地の狭さを紹介し、漁業の盛んなこと、魚の1人当たり消費量は世界一であること、などにも言及している⁽³³⁾。さらに他書同様、この100年での変化の大きさが強調されている。「1868年以降、国民が神のようにあがめる皇帝の強力な指導下で、かつての農業封建国家は、国際的評価をもつ工業国家になった」。その間人口は驚くほど増加したものの、土地の生産力はそれに見合う規模では増えなかった。北海道への入植は気候の厳しさのためにあまり成功せず、海外への移民数は、人口増加の速度に比べれば僅少であった。そして、

最後には力づくで、不足分の食糧・原料・入植地を獲得しようという試みは、第二次世界大戦の終結によってついに⁽³⁴⁾。

こう記した後で、外国に工業製品を輸出することで食料の輸入をはかることによってのみ人口増加に対応することができる、と述べている。また、これまでも日本は多くの若者を留学させるとともに、外国から専門技術者や軍人などを招いて欧米の科学技術を取り入れた点も指摘している。その結果、造船などを中心に重化学工業が発達する一方、木製品・製靴・玩具などの分野では零細企業が重要な役割を果たしていること、手先の器用さ

が求められるこれらの産業分野は、日本の輸出産業でもあり、そこで零細企業の占有率が高いというのは、欧米とは大きく異なる点であること、などを指摘する。「人口過剰の日本は、海外市場のための工業によってのみ生存でき」、「おとなしい労働者たちの賃金」は、欧米工業国の同業種に比べてはるかに低廉である、と低賃金による低価格製品の輸出が可能となっている背景を説明している⁽³⁵⁾。

さらに、東京・京都・大阪・広島・福岡などの都市についての説明がなされ、東京近郊の一家庭を訪問した際の様子が具体例として紹介されている⁽³⁶⁾。そして最後に、

東京は日本国民の生きる意欲で満ちている。官庁ではしばしば重要な決定がなされねばならない。というのは、第二次世界大戦終結以後、日本はすべての海外領土を、小さな琉球に至るまで失ったからである。あらゆる技術革新、近代工業や電化、外洋航海や飛行機による交通、近隣諸国との戦争〔日清、日露戦争のこと〕での大勝利と第二次世界大戦で受けた大敗北、などにもかかわらず、日本人は今日なお祖先の伝統を尊重して守り続けている国民である⁽³⁷⁾。

と結んでいる。なお、日本の郵便切手が写真で紹介されているのだが、驚くことにそれは「大日本帝国郵便」の20銭切手である⁽³⁸⁾。

次に、やはり代表的な教科書である『土地と人々』というギムナージウム中学年用の教科書の1950年版と60年版とを取り上げてみよう⁽³⁹⁾。若干の文章表現や挿し絵（茶摘みの様子だけは写真）に違いはあるものの、両者間の基本的内容にはほぼ変わらない（1950年版にはなかった挿し絵の説明が、60年版ではごく簡単ではあるが付け加えられている）。全体にこれらの挿し絵は従前の書物からの流用で、写真から描いたためか、鳥居の様子も微妙に本来とは異なるものとなっている⁽⁴⁰⁾。叙述内容も、地勢・気候・人種などを概観した後、1853年以後短期間で欧米に追いつき工業国家へ変貌して大国となったこと、女子・少年をはじめとする労働者の賃金の低さ、都市と村落の様子、などが記されている⁽⁴¹⁾。そして、第二次世界大戦によって日本は、「台湾、朝鮮、満州、南サハリン、クリル諸島」を含む領土の半

分を失うとともに、工場の半数も破壊されたと述べ、「戦後、日本は民主的な憲法を手に入れた。皇帝は退位させられなかったが、それまでの神がかり的な崇拜は放棄されなければならなかった」と続けている⁽⁴²⁾。これらの叙述は1950年版・60年版に共通しているが、次の件は60年版で登場する。

日本はすでに再び、大量かつ安価に生産するようになったので、欧米の生産物は日本製品と競争することができない。南米、南アフリカ、そして最近ではアジアでも、日本人はかつての販売市場を征服している。日本は現在ではアジア最大の工業国である⁽⁴³⁾。

ここで、再びヒンリックスに戻り、1959年版『地理』をみてみよう。前述のように57年版までは同一内容だが、59年版では項目・本文・写真が変更されている⁽⁴⁴⁾。しかしながらその内容は、戦前の風景写真を掲載していたり⁽⁴⁵⁾、地勢・気候・風土・産業などはほぼ従前と同趣旨の記述であったりと、本質的な変更は見受けられない。また、日本家屋の構造および生活様式の説明が詳細なもの依然として本書の特徴であるが、19世紀後半以後の発展の叙述ともども、戦前に比重を置いている感は否めない。第二次世界大戦後について、以前の版では、日本は「それまで日本が侵略した領域を再び失った」としか記していなかったが⁽⁴⁶⁾、59年版では、海外領土喪失によって耕地面積の少なさから「深刻な生存問題が生じた」点を指摘し、次のように述べている。

日本では数多くの改革が1945年以来実行された。天皇の権力と貴族の特権は廃止された。農民の土地は、大抵は小作地であったが、それを耕作する農民のものとなった。日本は、とりわけその工業と商船隊を拡大し、世界におけるかつての市場を日本製品の販路のために取り戻そうと努めている⁽⁴⁷⁾。

工業に関しては、日本が地下資源をもっておらず、原料を輸入しなければならないこと、その原料を国内で加工して完成品を輸出しなければならないこと、水力エネルギーが多く用いられていること、人造化学繊維を含む繊維産業のほかに化学工業・鉄鋼業も盛んであること、などが具体例と

ともに述べられている。日本製品の低価格については、「日本人の慎ましい生活要求では、男女工が安い賃金でやっていくことができ、商人もわずかな利幅で満足するからである」と説明されている⁽⁴⁸⁾。

以上みてきたように、1950年代になっても戦前までの日本のイメージと根本的に異なる記述が登場したわけではなく、基本的にかつての叙述が踏襲されている度合いが高いといえよう。敗戦後から50年前後にかけては、情報の質量ともに不足がちで、戦前の教科書記述に依拠している印象がひときわ強い。また、植民地統治の終焉を迎えた点がやや遅れて記述されるなどの問題点もみられた。50年代に入って、いずれの教科書も日本がそれまで侵略し獲得してきた海外領土を放棄した点を記しているのは、敗戦後の事実誤認を訂正する意味もあるのかもしれない。戦後改革については、天皇の神格否定・農地改革・日本国憲法（民主的憲法）の制定などに触れられているが、エキゾチックな生活様式の説明、および低賃金長時間労働による安価な製品生産とその輸出による経済の拡大、という2点に関心が集中している。前者に関しては、ドイツの分断状況もあってか、伝統を維持している国民である点が強調されている。後者については、特に低賃金の理由として、おとなしく、勤勉で、慎ましい国民性に解答が求められている。総じて、戦前のイメージの残像が色濃く反映している結果といえよう。

このような傾向が1960年代に入ってどう変化していったのだろうか。それを次節で検討する。

2. 高度経済成長期の日本

1960年代に入って日本はいわゆる高度経済成長期を迎えた。そのような日本がいかに記述されているのかを本節では検討する。

まず、『これが私たちの地球』の1960年版をみてみよう。本書には全く同一内容で67年版もある⁽⁴⁹⁾。旅行記などの書物や紀行文からの引用で構成されている点が特色で、写真ではなく挿し絵が挿入されている。主に衣

食住中心の旅行案内風叙述であるが、「いつも勤勉に」というスローガンの紹介や、父親が夜遅くまで働かなければ一家を養うだけの収入が得られない、などの指摘もみられる⁽⁵⁰⁾。

次に、1960年に出されたパウアーの『地理の授業』を取り上げてみよう⁽⁵¹⁾。本書の写真は、戦前の様子を写したと思われるものを使用している⁽⁵²⁾。叙述内容も戦前の書に依拠している部分がかなりみられる。戦後については、完全な敗北で海外領土を失ったこと、大陸の原料供給地・市場から切り離されたこと、などが記されている。また、日本人の生活様式として、「西洋の技術を摂取したにもかかわらず、生活・考え方・芸術・宗教における日本の文化は保たれた」こと、食事は米・大豆・魚・わずかの野菜・「自家製瓶詰め」(漬物)からなり、依然として肉類が無いこと、工場と商店はコンクリート製だが住宅は木造であること、外では洋服を着ていても帰宅後は着物に着替えること、などが述べられている。そして、国民に食糧と労働の場を提供するのは工業しかないが、石炭・鉄鉱石・銅・鉛などの資源が不足しており、盛んである繊維産業でも綿花・羊毛を輸入する必要があること、「山がちで多雨な列島では水力発電だけは豊かである。多くの工場がすでに電力に切り替えている」ことも指摘している⁽⁵³⁾。最後に、

日本の将来 この島国は、毎年人口が100万人以上増加するため、余りにも狭すぎる。二つの可能性しかない：海外移住——しかしこれまでほとんどすべての国々は日本人に対して境界を閉ざしてきた——と、失業者を就業させるために工業を拡大することである。そのためには原料供給地域と販売市場が必要であるが、それらは世界ではますます見出しにくくなっている⁽⁵⁴⁾。

と結んでいる。同じく1960年に出された『地球の国々』でも、日本をイギリス・西ドイツなどの国々と地勢・人口などの面で比較させる課題を設けているほかは、目新しい点はない。やはり、人口過剰と失業者の多さ、低賃金ゆえに低価格で製品輸出が可能であるとともに家族労働が必要であること、などを記している⁽⁵⁵⁾。さらに、ドイツ民主共和国の1961年版『第7

学年用地理教本』⁽⁵⁶⁾ の記述でも、低賃金政策によってほかの資本主義諸国の製品よりも遥かに安価な価格で輸出され、その結果ほかの資本主義諸国の企業家らをも敵にしていることなどを指摘、53年版とはほとんどその趣旨が変わっていない。わずかに、アメリカとの軍事同盟という点で日本が西ドイツと同様の位置にあることについての指摘が新たに追加されているくらいである⁽⁵⁷⁾。

それでは『ザイドリッツ』はどうだろうか。1962年・66年の二つの版を見ると、両者ともページ数から本文・写真・統計数字などに至るまで全く同一である⁽⁵⁸⁾。しかも表現は異なるものの、構成も基本的に1954年版と同じであり、衣食住・人口・地勢などとともに明治期以来の経緯に重点が置かれた叙述となっている。鉄鋼業の原料はフィリピン・マレーシア・インド・アメリカから輸入していること、造船業では世界最大であること、大工場のほかに幾千もの小工場が存在し、それが日本の工業に典型的であること、繊維製品がアメリカを得意先としていること、人絹の需要は第二次世界大戦以来確かに回復していること、などが新たに盛り込まれている⁽⁵⁹⁾。また、京都・大阪・東京など大都市の事例紹介や日本人の生活様式にスペースを割いている点も54年版同様である。新設されたのが「交通」という項目で、

都市・鉄道網・大工場を想起すれば、日本は今日では近代的国家である。多くの工業製品が世界的名声を得ている。多くの都市の家庭では、冷蔵庫・ラジオ・テレビなど、欧米的快適さを得ている。ほとんどの日本人がカメラを持っている。しかし、小規模な手工業や農業においては所得はわずかである。地方では人々は全く慎ましく生活している。都市と地方との生活レベルには大きな差異がある⁽⁶⁰⁾。

と結んでいる。「三種の神器」（通常は冷蔵庫・洗濯機・テレビ）が普及しつつある状況とそれに雁行する経済格差の広がりなどを記したものである。

1950年代を通じて根本的な変動のなかったヒンリックスの『地理』は、65年に新たな版が出ている⁽⁶¹⁾。写真が一部カラー化され、本文にも若干

の変更がみられる。しかしながら、文化的側面や生活様式などについての叙述が多い点は依然同様である。「日本の古い文化は刻々となくなっている」⁽⁶²⁾ という見出し自体が何よりも本書の特徴を物語っている。その見出しのもとに「日本を訪れた者は、現代的設備と日本固有の慣習とが対照的に並存していることに驚く。古来の風習とそれまでの建築様式は、新しい生活習慣や近代技術とは相沿わない」という書き出しで描かれているのは、都市の近代化と消え行く昔の風物や建物・服装の有り様である。そこでは比喩的対比として、緑に包まれ「古い日本の様式で建てられた」皇居と「市街の鉄筋コンクリートの高層建築」、着物を着て一日掛りの花見に出かける人々と洋服を着た観客で埋まる野球場の観覧席、「国会での掴み合いの乱闘シーン」と寺院に響く鈍い鐘の音、収穫祭で乱舞する人々と休み時間に屋上でジャズダンスをしている会社員、などが挙げられている⁽⁶³⁾。これとは対照的に、「日本の工業」という項目の記述は旧版よりも簡略化されている。1960年時点の数字をいくつか紹介してはいるものの、アジア・太平洋戦争の敗戦とその影響などは閑却されており、あたかも明治期以来一貫して成長を遂げてきたかのような叙述となっている⁽⁶⁴⁾。このほか1965年の『地理：アジア・アフリカ』も叙述の新しさがあまり感じられない。本書は従来の茶畑やアイヌの写真を載せ、戦前の発展経緯を主に記している⁽⁶⁵⁾。戦後の記述としては、海外領土の喪失、1939年には世界第3位になった「商船隊」が現在再び第5位になっていること、鉱産資源の不足、水力発電は盛んで「電燈・電気の無い村はない」こと、伝統工芸も存続していること、造船・機械・生糸・人絹などを中心とした「高度に発達した重工業」および「その非常な慎ましきで、日本人はその工業生産物を安く提供することを達成したので、短期間で古くからの工業国と並んで今日では世界市場に確固たる地位を築き上げた」ことなどを紹介している⁽⁶⁶⁾。

1970年代以降も引き続き改版されているものの中にシェーファーの『地理』があるが、その1968年版を取り上げてみよう⁽⁶⁷⁾。「日本の風景は特に変化に富んでおり美しい」ことを含めて、地形や地震の多さ、天候などから筆を進めているのは他書と同様である。「人口過剰」という見出しで、

1880年以降の人口増加の概略を紹介している（1966年＝9,900万人という直近の数字を使用）。土地の狭さから「太平洋地域や特に朝鮮・満州」へ海外移住者が多かったこと、第二次世界大戦後「東南アジアの全侵略地域は放棄しなければならなかった」こと、が記されている。また、漁業は盛んであるものの耕地面積割合の少なさから、結局必要とする食糧の80%しか賄えず、残りは輸入せざるを得ない点を指摘、そのためには生産性の高い工業によって支払いを可能とするしかないとしている⁽⁶⁸⁾。

そして、「日本の工業は世界市場を席捲している」という項目を設け、工業に関して詳細に述べている。すなわち、中国人から何世紀も前に伝えられた陶器・和紙・絹織物などの手工業における熟練さと家内工業の成長、現在でもこれらの伝統工芸は大切に育てられていること、「1853年の開港以来日本経済の近代化は始まった」こと、欧米の学者・技術者の招聘と留学生派遣による欧米工業国からの模倣・学習とそれは今日でも同様であること、そうして採り入れた技術を一層発展させていること、などが記されている。しかし、乏しい地下資源のために「原料の心配」は常につきまとい、原料輸入が不可欠である点も強調されている。さらに、石炭が採れる地域では火力、ほかは水力によって電力供給がなされていることが紹介され、「工業生産」は「中央日本」に集中していること、絹織物業から生じた繊維産業がかつては支配的で、東南アジアやアメリカを市場としていたが、第二次世界大戦後は重工業・機械工業が盛んになり、鉄鋼生産ではイギリスを抜いて米ソに次ぎ世界第3位、自動車生産では西ドイツにかわって世界第2位になったこと、造船は世界第1位で「1965－1966年には世界の総造船量の40%が日本で生産された」ことなどを記述している。「労働集約的かつ高度の技術を要しながらわずかの原料で生産できる」工業製品として、双眼鏡・カメラ・トランジスターラジオ・テレビなども挙げられ、農産物・水産物を缶詰に加工する産業も盛んであるとしている。低賃金による低価格生産のために日本製品の世界市場での販売が促進され、アジア・アフリカ諸国はもとより欧米が最重要貿易相手となりつつある点にも言及されている⁽⁶⁹⁾。

視覚的にも印象的なのが、見開きの両ページに「金閣寺」と「名神高速道路と東海道新幹線との交差」の写真を配した「伝統と進歩の狭間の日本」という項目である⁽⁷⁰⁾。小柄・黄褐色の肌・黒髪といった日本人の外見的特徴に始まり、その性格的特徴を

自制心があり、不幸にあっても容易にくじけず、喜怒哀楽の感情をめったに表わさない。賞賛されるのは、その勤勉さ、熟練さ、聡明さ、そしてとりわけ礼儀正しさである⁽⁷¹⁾。

と記している。日本文化が中国文化の影響を大きく受けつつ独自性を持っている点も述べ、日本の家屋、とりわけ僅かな家具しかない内部の様子が「ヨーロッパ的概念においては空虚」であると映ずること、日本の家庭生活にも伝統が刻印されていること、などが指摘されている。最後に、「近代技術と西洋文明の影響」について以下のような叙述がなされている。

近代技術と西洋文明は日本の生活にますます影響を及ぼしている。都市の家庭では洗濯機・テレビを持っている。カメラと自動車は多くの日本人にとっては当たり前である。表向きの生活では洋服を着ることが一般的になっている。鉄道・バスは、毎日何千もの労働者を大都市の近郊から職場まで運び、再び住宅地に戻している。広い幹線道路が大きな人口密集地区を貫通している。その幹線道路の上を車が滔々と流れ、道路脇にはコンクリート・鉄・ガラスでできた近代的大建築が建ち並んでいる。色鮮やかなネオンサインが、工場で最新の生活様式で生産された製品を宣伝している。至るところで日本の生活が変容しているのが感じられる⁽⁷²⁾。

西洋化・近代化による変容の側面と伝統が維持されている側面とが並存してはいるが、前者が後者を凌駕しつつある状況を本書の叙述はよく示している。

本節でみてきたように、1960年代のイメージは、日本の経済成長の一端を窺わせるものではあるが、50年代からの継続性が依然として強く感じられる。すなわち、鉄鋼・造船・自動車・繊維などの産業分野では世界有数の生産量を誇るに至ったものの、不足する原材料を輸入するために低賃金

労働に基づく製品価格の抑制は不可欠であり、それによって世界市場への競争力をかろうじて維持できているという点は、50年代と同様の叙述である。わずかに光学機器や電気製品の重要性が高まっている点を指摘するものが散見されるのが新しい傾向であろう。さらに、過去100年を概観する叙述傾向は相変わらず多く、ややもするとアジア・太平洋戦争による断絶よりもむしろ連続性が印象づけられる結果となっている。戦前の教科書にすでに登場していた諸情報——地勢・気候・産業・文化・風俗など——が反復掲載されているのも変わっていない。西洋的な感覚からすれば伝統的な日本文化は神秘的な要素を持ち、それだけに惹かれる部分があるのかもしれない。日本家屋や生活様式の描写は、意外なほど詳しい。

異国趣味的な生活様式の説明、および低賃金長時間労働による安価な製品生産とその輸出による経済の拡大、という1950年代までにみられた関心は60年代になっても継続していた。日本の経済成長ぶりが顕著になってくるにつれ、この両者はいささか短絡的に結びついてさえきた。後者の解答を前者に求めようという傾向はむしろ強まっているようである。「おとなしく、勤勉で、慎ましい」ために低賃金で労働でき、その結果輸出コストは低減、各地の市場を席捲している、という説明が基本的にパターン化してきている。そして成長ぶりに驚き、脅威すら感じるようになると同時に、“神秘的な”日本文化への魅力も増しているといっていよう。

一方、日本の変容ぶりも確実に叙述されている。「伝統と進歩の狭間の日本」という表現が端的に示しているように、西洋的なものと日本的なものとの並存状況をどう捉えているのか困惑し、そのために日本イメージも確定しにくい部分が出てきている。1950年代までは、その並存状況は日本の伝統・風景の中に“異国情緒”が点在するといういわばモザイク的なものであり、したがってそれ自体が興味ある対象であった。だが、60年代に入ると、その域を超えつつあったのではないだろうか。実は、必ずしもドイツの教科書記述の中だけにとどまらず、当の日本社会自体が現実として「伝統と進歩の狭間」にあり、そのような困惑を抱えていたといえよう。「イエ」の「ウチ」・「ソト」という特徴を含めて、日本人論がこの

頃から注目されるようになったのも、そのような状況下でのアイデンティティを模索する志向として、ある意味では当然であったのかもしれない。

3. 成長と矛盾の中の日本

前節でみたように、「伝統と進歩の狭間の日本」——西洋的なものと日本的なものとの並存状況——が1960年代には顕著になってきた。それが70年代になるとどのように描かれているのだろうか。

まず、シェーファーの『地理』1970年版をみてみよう⁽⁷³⁾。写真は大幅に変更されているが記述内容は、地震や台風の被害状況例が一層詳細に記されているほかは、68年版と重複する部分が多い。その中で目を引くのは、東京について独立項目を設けている点である。そこでは、東京がこの10年間でニューヨークの人口を抜いて「世界最大の都市」になり、約1,000万人が住んでいることを述べた上で⁽⁷⁴⁾、銀座の写真を掲載しつつ次のように記している。

1964年のオリンピックを契機に市電のレールはすべて撤去され、近代的高速道路が建設された。このような都心部とは対照的に、周辺地域ではどこも似たような低層住宅と、複雑に入りくんだ道路が単調で重苦しい印象を与えている。そこではいまだに木造家屋が軒を並べ、そこここに消防署の物見櫓が聳え立っている。この貧しい地区で道に迷わないのは至難の業である。……中心部と周辺の著しい格差は、この数十年間での日本の急速な発展を反映している⁽⁷⁵⁾。

大都市においても中心と周辺の構造格差が拡大している点を指摘しているのは注目してよい。産業については、人口増加のため「米、小麦粉、砂糖など」の食糧も輸入する必要があり、「工業はさらに拡張されなければならない」こと、だが地下資源も不足しており鉄鉱石は85%、石油は80%を輸入に依存していること、「日本のルール地方〔ドイツの代表的な工業地帯〕」である瀬戸内海には工業地域が拡大しており、高炉・煙突・濃煙が風景の一部となっていること、「世界の頂点に立っている」造船業・

「アメリカに次いで世界第2位」の化学繊維産業・「世界的名声を得ている」光学機器類など産業の具体例と多くの零細工場の存在などが紹介され⁽⁷⁶⁾、

低賃金のために、価格は実に安価である。そのため、極東で生産された商品が、南米・アフリカ・インドのヨーロッパ工業国の市場を次第に席捲している。それどころか、ヨーロッパにも進出してきている。

こうして日本人は、熟練さ、勤勉さ、慎ましきで、日本をアジアの指導的な工業国にしたのである⁽⁷⁷⁾。

と結んでいる。具体的叙述と情報量はそれなりに豊富だが、低賃金の理由は明記されていない。一方、ヨーロッパ市場に日本製品が拡大し、それに対して脅威を感じつつある様子も窺われる。

次に、『ザイドリッツ』1972年版をみよう⁽⁷⁸⁾。62年版と比べると、都心の道路事情や新宿の街並みを写した写真に一部差し替えられているが、生活様式や住宅などの写真は変わっていない。記述項目自体は基本的に同様といってよいが、各項目の記述をさらに小分けして小見出し（以下《 》で示す）を付けるなど、理解を容易にしようとする工夫が目につくとともに、直近のデータ（1970年）も使用している。内容的にも従来にはみられない指摘が散見されるため、本書をやや詳しく紹介しておきたい。

「能率の良い農業」という項目では《副業としての農業》として、100年前には80%だった農業人口が現在では18%に減少したこと（前掲表1によれば実際には約10%である）、都市部の拡大によって減少する耕地面積にもかかわらず、

現在では前年よりも多くの食糧が生産されている。日本では記録的な米の収穫量を得ている（1ha当たり5,500kg）。1970年と71年には生産過剰のために稲の作付け面積を減少させなければならないほどであった。

食生活が次第に変化しているため、米の需要は減少している⁽⁷⁹⁾。

と、減反と米離れの状況が紹介されている。一方「日本——世界第三位の工業国」という項目では、1853年以来欧米に倣った近代化など主に明治期の経緯を記し、

まもなく日本の工業は、欧米の機械を模倣するだけでなく、自ら機械

を造ることができるようになった。日本は100年以内に世界で第三位の工業国となった⁽⁸⁰⁾。

と概観する。《大工業の第一局面：繊維産業》・《大工業の第二局面：鉄鋼、化学、エレクトロニクス》と続くが、後者の中で、第二次世界大戦後に工業の大躍進が開始され、工場用地造成のために沿岸を埋め立てなければならなかったこと、鉄鋼業に始まり、造船業・機械・自動車・化学工業が次第に成長してきたこと、さらに光学機械を含むエレクトロニクス産業の発展が紹介され、「日本のエレクトロニクス産業は近代の重化学工業や鉄鋼業と同様成長産業である」⁽⁸¹⁾と指摘、今後の成長を予測している。

さらに本書で注目されるのは、《急速な上昇の根拠》の中で「日本の重工業の発展」を促進した「要素」として以下の6点を指摘している点であろう（数字も原文通り）⁽⁸²⁾。

1. 沿岸部または沿岸部に近接している工場立地
2. 海外の原材料の手頃な価格での利用
3. 最新の機械や生産方法の投入
4. 外国の発明の購入
5. 自国市場の急速な拡大：1970年には、全世帯の92%がテレビを、88%が洗濯機を（1959年には17%）、85%が冷蔵庫を（1959年には3%）、それぞれ所有している。
6. ほかの工業諸国よりもいくらか安い賃金。けれどもその開きは縮小している。たとえば造船所では、ドイツ連邦共和国と同程度の賃金が支払われている。

実際に1960年代から70年代前半にかけて名目賃金は消費者物価を上回って上昇し続け⁽⁸³⁾、表2からも上記「6.」で指摘されるように、日本とドイツの賃金格差縮小が急速に進行したことは首肯できる。すでに述べたように、低賃金長時間労働を背景とする加工貿易という特色および京浜・京阪神工業地帯についてはこれまでも繰り返し記載されてきた。しかし、従前の記述は個別事象の指摘の域を出ていないか、ステレオタイプの説明に終わる嫌いがあった。経済成長の理由を包括的・構造的に説明しようとする

表2 日本とドイツの1時間当たり賃金比較（製造業）

	1965年		1975年	
	賃金額(円)	指 数	賃金額(円)	指 数
日 本	163.3	100.0	866.6	100.0
西ドイツ	367.2	224.9	1,168.9	134.9

（資料） 指数は日本を100とした場合を示す。前掲『数字でみる日本の100年』、93ページより作成。

る類の記述がここに登場した。

さらに《小規模工業》では、「400万以上の零細工場」において靴・カバン・鉛筆・自転車など日用品が生産されているが、1日8時間労働や週5日労働などとは無縁であると述べている。《遠い国々からの原料》・《完成品の輸出》と続き、輸入原料に依存し製品を輸出する構造が統計資料でも示されている。日本が年間総生産の11%を輸出しているのに対して、ドイツ連邦共和国は19%であることを紹介して、「世界市場における危機はドイツ連邦共和国のほうが日本よりも深刻であろう」ことを付け加えている⁽⁸⁴⁾。

また、「日本は人口過剰か？」という項目では、「日本は人口過剰であると再三主張されるが、現在ではもはやそうはいえない」という従来にはない書き出しで始まっている。そして、平野部の日本の人口密度は1,350人で確かに高く、年間約100万人ずつ増加しているが、農工業の発達ですべての人々に職場は確保されている、とした上で、

たとえばドイツ連邦共和国は、日本よりも外国での製品販売に依存している。それでもドイツが人口過剰だとは特徴づけられないだろう。

それどころか我々は自国に外国人労働者をも迎え入れている。人口過剰とは、一国の農業や工業が住民に生活必需品を十分供給できない場合にのみあてはまる⁽⁸⁵⁾。（傍点部分は原文ではイタリック）

と述べている。やや論旨が不明瞭な観があるが、「人口過剰」を従来のように人口や人口密度だけで捉えるのではなく、職場の確保状況や生活必需品供給能力との兼ね合いでみるべきであるという趣旨であろう。

そして最後の項目が「日本の都市とその問題」で、《古い日本の都市》・

《現代の都市》と対比する形で記述されている⁽⁸⁶⁾。特に後者では「都市計画の欠落、騒音、汚物、交通が大問題である」と指摘し⁽⁸⁷⁾、《解決を待ちうけている諸問題》という小見出しで、

戦後、日本政府はとりわけ工業の構築を促進した。しかし一般の人々が必要としているものには十分な配慮がなされなかった。すべての大都市で十分な交通手段が欠落している。(傍点部分は原文ではイタリック)として、乗客を満載した「通勤地獄」電車、渋滞する道路、大都市での住宅難、大気汚染、河川の水質汚濁、大都市間交通、などの諸問題を掲げている⁽⁸⁸⁾。

また1973年には、『人類が地球を作り変える』が出されている⁽⁸⁹⁾。本書は、「舞子」や「スチュワードス」の写真、漢字の成り立ちや蒙古ひだの図版などを掲載し、雑誌記事からの引用も多いのが特色である。工場廃棄物などの公害に対して警鐘を鳴らし、経済成長について「日本は伝統と進歩とを完全に結び付けている」点を重視した説明をしている⁽⁹⁰⁾。

シェーファアの『経済圏としての地球』1973年版はどうだろうか⁽⁹¹⁾。1970年版シェーファアの『地理』とは構成・内容も異なり、人口問題が独立してテーマとしてまとめられ、イギリスと日本の過去200年余りの人口増加がグラフで示されている。独立項目としての日本の箇所では、「鎖国」と「開国」という対比でまず略史が紹介されている。そして、「開国」が短期間で経済生活の改革をもたらし、住民の文化を変えたことを述べ、

新たなことは、急速に成長する太平洋側にある大都市の工業・商業地域から始まった。そこには中産階級と都市プロレタリアートが形成された。一方実に素朴な地方の村落において、また日本人の伝統意識や国民意識の中に、古いものは保たれた。……日本人は、西洋の精神に溶けこみつつも日本の特徴を保持することができた⁽⁹²⁾。

と、都市と地方・労使の階級形成・進歩と伝統という対立項を包含して指摘している点で注目される。

本書でも「世界第3位の工業大国への上昇」は関心の中心である。「日本の工業構造はこの100年で大きく変容した」として概略を述べ⁽⁹³⁾、

第二次世界大戦後、……復興は1953年に終了した。今や日本は、世界第三位の工業大国へ上昇した。それ以降、年間10%という高い日本の成長率を達成できた国は他になかった⁽⁹⁴⁾。

と記し、鉄鋼・自動車・造船の分野での具体的「上昇」ぶりを数字で紹介している。とりわけ自動車産業については、「ドイツに追いついた」日本の急速な伸びに驚きを隠さない。このほか、「コンピューターや電気・光学機器の製造、プラスチックや化学繊維について」も同様に日本の著しい拡大がみられる点を指摘し、次のように記している。

日本の輸出品は、欧米市場に確固たる地歩を占めている。基礎産業の原材料が不足しているにもかかわらず、消費財産業として日本の輸出品は急速に成長した。そのため、開国後の最初の50年間におけるよりも、さらに産業拡大のための基礎が一層拡大された⁽⁹⁵⁾。

この叙述も「開国」後の「近代化」に比重をおいてきた従来のそれとは一線を画すものといってよいだろう。

さらに本書は、日本の「経営構造」についても踏み込んだ記述をしている。ヨーロッパ的経営構造とは異なり、全就業者の半数以上が「従業員3～100人規模の零細企業」で働いていて、それらの零細企業は「単純な手段で生産し、安価な消費財を国内市場に供給している」こと、「従業員1,000人以上」の大企業は合理的に組織化された労働によって全零細企業の合計売上額と同じ売上額を達成していること、零細企業は資本力が弱く、そこで働く人々の低賃金につながっていること、これまで日本では経営規模・経営分野・経営立地によって賃金は大きく変わり、産業別労働組合によって一元的に規定されることはほとんどなかったこと、家父長制的序列は特に大企業での終身雇用に反映されていること、企業への忠誠心は賞与や厚生面で報いられていること、「55歳程度で」定年を迎えても、退職金はわずかな年月分の生活費にしかないためより小さい企業でさらに働き続けること、近年では、出生率減少が労働力不足と流動性増大を惹起したため、労働者の企業への帰属意識がはじめてゆるみ、労働組合の影響が増していること、戦後解体されたはずのコンツェルンはアメリカとの講

和条約締結後に再び新形成され、労働組合はそれに対峙していること、そのコンツェルンは大銀行も支配しており、政党への献金を通して議会政治をも左右していること、などが説明されている⁽⁹⁶⁾。さらに、「労働・居住条件、レクリエーション設備、交通網」といった「インフラストラクチュアの拡大」が急速な経済成長の中で等閑にされている点を指摘し、大気汚染・文明病・騒音などの「環境汚染問題が工業化とともに深刻化している」こと、「老人や病人の介護」という問題とともに、これらの解決のためには「新たな計画」が必要であることを説いている。その「新たな計画」は、産業構造がかつて飛躍的に成長していた時には顧みられなくてもよかった規準を、今は考慮しなければならなくなっている。……日本は、これらの必要なそして費用のかかる諸改革を以て、日本の工業化の新たな段階に入ろうとしているのである⁽⁹⁷⁾。

と結んでいる。これらは、終身雇用形態と労働者の終身雇用意識、ならびに政財界の癒着構造や日本の政治風土への言及として注目してよい。すでに30年近く前に現在でも通じる指摘がドイツの地理教科書に掲載されていたのである。

第1節で取り上げた『土地と人々』は、1960年代を通じて記述内容に変化はみられなかった。70年代に入ってから記述を検討するため、まず71年版を取り上げることにしたい⁽⁹⁸⁾。日本の章の冒頭には、富士山を背景に走る新幹線の写真が掲載されている⁽⁹⁹⁾。農業については、耕地面積割合の少なさを述べながら、「田畑は都市や工場のすぐそばまで広がっていることがよくある。現在では、労働力不足からしばしば休耕地（社会的休閒）が見かけられる」⁽¹⁰⁰⁾と、減反による休耕地の広がりも合わせて紹介している。工業に関しては、「今日日本は、西ドイツを追い越して、米ソに次ぐ世界第三位の工業大国であり」、「価値の高い半製品や完成品の輸出によって、工業原料ならびに不足している食糧の輸入を賄うことに成功した。この15年で人々の生活水準は大いに向上した」（傍点部分は原文ではイタリック）と記している。鉄鋼・造船・化学工業・電気工業・光学機械など盛んな産業分野が列挙され、「輸送に便利な」大きな港湾近くに工場が

立地し、「近代的で高度に発達した機械を備えた多くの工場では、比較的低い賃金で労働者が同質の製品を作っている」ことを指摘、そのため東アジア・インド・アフリカで、さらには欧米の一部においてさえ、低廉な日本製品がヨーロッパの工業製品を駆逐している、と述べている⁽¹⁰¹⁾。最後に「今日の位置づけ」として、

今日日本は再び高度に発達した工業国となり、政治的にも再び世界の諸国民から注目されるようになった。日本の伝統の風俗や習慣が忘れられることなしに、西洋的な生活スタイルはますます強まっている⁽¹⁰²⁾。と結んでいる。成長理由の分析とともに、前節で触れた伝統と西洋化の並存状況をめぐる困惑が、1970年代になっても続いている。その困惑は本書の79年版にも見受けられる⁽¹⁰³⁾。

さらに、1970年代に三つの版を出している『地球を三周』でこの点を検討してみたい⁽¹⁰⁴⁾。

初めに1970年版の記述内容を確認しておこう。「日本帝国」(“das japanische Kaiserreich”)という用語がいきなり登場するのには驚かされるが、地勢、気候、「人口過剰」ぶり、大都市の高層の鉄筋コンクリートビル街と「近郊の町」の「藁屋根・柿板屋根・瓦屋根の多くの小家屋」などがまず述べられる。「藁屋根・柿板屋根」については明らかに過去の情報によるものであろう。次いで農漁業について経営耕地が小規模なために大規模な機械化ができないこと、そのかわりに灌漑設備の整備・化学肥料の多用・品種改良などによって1 ha当たりの収穫量が絶えず上昇していること、家畜総頭数は少なく、牛は主に播曳用の動物として利用されていること、などが述べられている。なお水田で「緑藻類を栽培している」という件があるが、これは海苔の養殖の誤解であろう⁽¹⁰⁵⁾。工業に関しては、「大量の工業製品を外国に輸出することでのみ日本はその人々を養うことができる」として、1853年以来の概略を簡潔に紹介しているが、時期を飛ばして簡略化しすぎている嫌いがある。外国製品の模倣と外国技術の摂取によって熾烈な競争に勝ち残り、ドイツでも日本からの写真機・望遠鏡・トランジスタラジオが低価格で提供されていること、「地下資源に乏し

く、原材料を輸入しなければならない」反面「その工業生産品の大部分を輸出しなければならない」こと、鉄鋼生産の発達とそれが国内で造船・自動車・機械工業などに供給されること、特殊鋼と圧延鋼は輸出されること、などを記すとともに、世界で最大の船舶を建造する技術と実績、アジアや北米・中米を主要市場とする自動車産業、世界第二位の化学繊維生産、等々具体的な紹介もなされている。真珠の養殖について、選別作業の写真を掲載して詳細に説明しているのは面白い。その一方で、石炭が主要エネルギーであるとの前提で叙述し続けている点は情報の遅れを示すものといえよう⁽¹⁰⁶⁾。

1975年版になると叙述のスタイルが変わってくる。日本に関する章のタイトル自体が「急速な日本の経済成長」となっている。「1960年と70年の間に日本は世界第三位の経済大国に上昇した」ことが指摘され、具体的な産業分野についての成長ぶりが図表を交えて1970年版と同様に紹介されている⁽¹⁰⁷⁾。

1975年版で注目されるのが、「成長の諸条件」という項目を設けて、日本の社会経済全般を説明しようとしている点である。そこではまず、1965年の「20年計画」で政府は生産を5倍にするとの目標を明言し、多くの国民もそれを「国民的使命」とみていること、造船業などの企業は政府によって税金から輸出補助金を受け取っていること、軍事費に多くを支出する必要がないため西ドイツ政府よりも多くの資金を日本政府は経済のために使用できること、などが述べられ、続いて以下のような小見出しが並べられている（括弧付数字は原文にはなく、便宜的に付した）。

- (1)日本の経済成長のために、日本の労働者やサラリーマンたちは西欧工業国の労働者やサラリーマンたちよりも長い時間働いている。
- (2)多くの日本人はこれまでは企業と密接に結びついていると感じていた。
- (3)日本では低い賃金が支払われている。
- (4)高齢者への援護（老人介護）が十分ではない。
- (5)日本企業は安いコストで生産する。
- (6)日本は、世界最大の貿易大国の一つである。

(7)日本企業は多くの国々、特に東南アジアで投資している。

(8)日本はその国内市場を外国の競争相手から保護している。

(9)住民の食糧は自国の農業によって約85%まで保証されている。

各指摘に加えられている説明の中で注目される部分は以下の通りである。

(1)年間20日の有給休暇が保証されているが「多くの労働者はこの日数をつなげてとらない。なぜかといえば、その企業にながく留まろうとすれば、彼らはその地位が気にかかるからである」。

(2)「日本企業は大家族にたとえられる」。「企業は生活共同体である」。その「一員」とっては「会社が成長することが最も重要であり」、また会社は住居・福祉厚生など各種の面倒をみ、結婚相手を見つけることさえ手助けする。欧米のように産業別労働組合に加入することはなく、従業員は企業別組合に所属している。

(3)学歴に応じた賃金体系や退職金制度の存在と零細企業での劣悪な賃金。

(4)55歳で「示談金」(＝退職金)を受け取るが、老齢年金は初任給よりも低額で、そのうえ物価上昇もあるため、「賃金が減るとしても、さらにその企業で働き続けたりして、収入を求めるのである」。老後に備えてもともと低い賃金の一部を貯蓄に回している。

(5)「低賃金、多くの従属的下請企業の存在と手厚い国家の保護は、日本の大企業にとって他国の競争者に対しての重要な利点である」。最新生産設備による低コスト生産の維持。「日本の企業家にとって、その企業の成長は企業家個人の贅沢や全従業員の労働条件の改善よりも重要なのである」。

(6)両大戦間期以降の繊維製品を中心とした輸出拡大、当初は「安価ではあるが品質は全く良くないといわれた」。現在では自動車・船舶・鉄鋼・ラジオ・テレビ・テープレコーダー・時計・カメラ・ピアノ・スポーツ用品など多くの製品を高品質低価格ではかの工業国に輸出しているが、「近年日本製品は、アメリカでは、高率の輸入関税のために高くなった。それ以来、日本はヨーロッパ市場に参入しようと強力に手を尽くしている」。

(7)インドネシア、マレーシア、韓国、台湾、タイ、フィリピン、シンガポール、南ヴェトナムなどが重要な貿易相手。日本よりも低賃金である

これらの国々に日本企業は現地工場を建設、「しかし国内市場での競争を避けるために、日本政府はそこで生産された製品の輸入を禁止している」。日本の工業製品にとっては、東南アジアは巨大な販売市場だが、その理由は「ヒモツキ借款」にある。「受取人には日本製品購入が義務づけられる。そうして日本人は、より弱小な近隣諸国の経済を支配しているのである。このような従属性の強さに対して、日本人に対する抗議が次第に起きている。というのも、日本人が経済関係の利点のほとんどすべてを持っているからである。特に非難されているのは、日本人は現地にとけこまず、どこででもあたかも日本にいるかのごとくふるまう、という点である」。

(8)日本政府は外国企業の日本進出を厳しく制限し、外国製品には高率の輸入関税をかけている。けれども、他国が日本からの輸入を制限するのを恐れる企業家の声もあり、日本は制限を緩和し始めている。

(9)「1970年以来、日本は最早米を一切輸入していない。農民に一層の生産を促すために、政府は固定した米価を定めてきた。その結果、米の収穫量は劇的に増加した。その結果農民は、再び減反すれば、補助金を受け取れることとなった」⁽¹⁰⁸⁾。

このように、集団意識や企業家倫理、市場や資本の自由化を阻む姿勢、減反・生産調整などにも言及がなされ、日本社会を分析的に叙述する傾向がより明らかになってきている。

さらに、「成長の諸問題」と題された項目では、以下の指摘が小見出しとして掲げられている（丸数字は原文にはなく、便宜的に付した）。

- ①日本には原材料がほとんどない。
- ②日本は世界中のどの国よりも多く原油を輸入している。
- ③日本人の70%以上が都市部に居住している。
- ④日本人は海を埋め立てて建築用地を獲得している。
- ⑤日本の交通網はさらに拡張されなければならない。
- ⑥日本経済の急速な成長は深刻な環境汚染を引き起こした。
- ⑦給水は十分に確保されていない。
- ⑧住宅不足は深刻である。

⑨日本経済は今後もこの10年間と同じように急速に成長できるのだろうか？

同じく各項の説明の中から目を引く箇所を拾い上げてみよう。

②「政府は近東の原油供給国への低利借款による経済援助を大幅に増額している」とともに、そのほかの国々での天然ガスや油田の開発に日本企業は参加している。

③「1972年の日本列島の新たな創造計画」(＝日本列島改造論)は「人口と産業を全国均等に配分することを見込んでいる」。「これまでのところ、拡張はほとんど太平洋沿岸のみに限られていたので、今やアジア大陸対岸部が援助されるべきである」。

④神戸のように、周囲の山を崩して住宅地とし、そこから出た土砂で海の中に人口の島を建設して近代的港湾施設にする。

⑤1973年に初めて高速道路ができたが、有料である。公共交通手段はピーク時には激しく混み合い、駅では「中へ押し込む者」[いわゆる「尻押し部隊」]ができるだけ多くの人を一つの車両の中に入れようとする。青函トンネルの着工と高速道路網整備、その結果山間部の保養地域開発。港湾・空港拡張の必要性。

⑥高濃度の水銀を含む工場廃水による水俣病と漁民らの抗議行動、その結果、政府も浄化設備建設と浄化を義務づける旨の法改正を実施。東京のスモッグと呼吸器系の病気で苦しむ人々。「かつては地震のために高い建物は建てられず平屋であったが、高層ビルの建築によって、都市では光と太陽が奪われた」。

⑦ダム建設の遅れと給水制限による対応。それでも深刻化する水不足。

⑧住宅の「建築は到底十分とはいえない」。「相変わらず大抵の日本人は小さな木造家屋に住んでいる」。しかし、「ほとんどすべての住宅にテレビ、しばしばカラーテレビや冷蔵庫がある」。「一方、約半数の所帯で水洗トイレがなく、東京ですら下水道が完備されているわけではない」。「人口集中地域での非常に高額な土地価格と建築コスト」のために、新しく作られている住宅もそれまでの家屋より広いというわけではない。

⑨「日本の『経済の奇蹟』は、これまで安価な石油と原料とを制限なしに輸入できたおかげである。これらの石油と原料を低賃金に基づいて高品質の工業製品に加工生産し、全世界に低価格で売ることができた」。工業成長にはなお一層の労働力が必要だが、最近では十分な数の労働者を低賃金で獲得することはできなくなり、多くの企業でストライキが起きている。また、「貨幣価値の低下（インフレーション）は、近年すべての工業国に降りかかっているが、日本では最も深刻である」。「多くの日本人が今日では満足していない。『まず生産を！』という原則は非常に長い間有効であった。しかし、1970年代には多くの日本人は『まず人間だ！』という新しい標語を掲げている。長らく価値を持っていた日本人の『天皇と国家のための労働』という言葉は、最早すべての被雇用者たちからまともに受け取られなくなっている」⁽¹⁰⁹⁾。

日本列島改造論とそのブームの一端⁽¹¹⁰⁾を紹介する形にもなっているところもあるが、全体として日本の経済成長の本質と問題点とを同時に捉えようとしている点は重要である。

1980年版でも統計数値を新しくしているほか、項目立ては基本的に75年版と同様であるが、表現の変更や新たな事例紹介など若干の変化がみられる⁽¹¹¹⁾。たとえば、世界第二位の自動車生産国であると述べる件で、トヨタの例が次のように紹介されている。

名古屋では、最大の日本の自動車コンツェルン・トヨタが、自らの都市をつくった。その人口は25万人で企業の名前をつけている。主力となる労働力を発展育成するために、トヨタはそこに自社の工業高校を所有している⁽¹¹²⁾。

また、「成長の諸条件」の項目では、不十分な社会保障制度に起因する各家庭の貯蓄高の高さと企業の設備投資資金の出所との関連を指摘するなど注目すべき記述が新たに付け加えられている一方で、いわゆるヒモツキ援助による東南アジアへの経済支配を衝いた1975年版の記述が削除されている。また、終業後も「上司が帰ってしまうまで留まる」慣行、「日本はこの間貿易制限をいくらか緩和した」のは輸入制限を継続すれば欧米から逆

に締め出される可能性を恐れたためであるとの背景説明、牛肉に見る内外価格差の実態など、より具体的に叙述されている⁽¹¹³⁾。

次の「成長の諸問題」では、「1978年に6つの原子力発電所が操業を開始した」こと、日本列島改造計画は環境保護を困難にし、地価上昇を招くという問題点を抱えていること、「カドミウム金属が水田の灌漑用水に入って、骨を破壊するイタイタイ病が発生した」こと、などが記されているほか、「給水は十分に確保されていない」という見出し自体が削除され、「人口集中地域では保養施設がない」が新規見出しとして追加されている。そして最後に、

日本はこれまでその経済成長で工業国の頂点の地位を守ってきた。しかし将来もほかの工業国に比べて急速な賃金の上昇と物価の高さによって、日本がこの地位を保ち続けるのはますます困難となるだろう。……失業と政府の経済政策への抗議によって、人々の気分にも変化が生じてきている。

と述べ、韓国などのように「これまで日本に依存していた国々が、競争相手に成長した」ことや「窓際族」のように政府統計に入らない「20～30万人の隠れた失業者」の存在を指摘している⁽¹¹⁴⁾。

如上の記述をみると、なぜ日本の高度経済成長が可能だったのか、しかも持続的にそれが可能だったのはなぜなのか、今後もそのような高い成長率は継続されるのだろうか、という問いかけが教科書記述においても基調となっている。そしてその答えは、1960年代までのように「慎ましい」国民性と生活様式のゆえの低賃金労働というステレオタイプ化された説明に求められてはいない。具体的な事例や慣行がかなりの程度紹介されつつ、社会経済的な分析が行われている。特に『ザイドリッツ』やシェーファーの『地理』にみられるように、叙述全体が日本の現実を反映する傾向が顕著となり、それは日本に関する情報量がそれだけ豊富になってきた証左でもある。もっとも、「伝統と進歩の狭間の日本」をどう捉えるのかはいまだ定まっていはいないようである。

また既に紹介しているが、『地球を三周』には学歴賃金体系と零細企業

での劣悪な賃金を述べた部分で、

女性は、同等の労働を果たしているが、男性よりももっと不安定な状態に置かれたままで、賃金もずっと劣悪である。しかし、家族により多くの収入をもたらすために、ますます多くの女性が就業している⁽¹¹⁵⁾。という件がある。このような形で女性の地位に関する記述は1960年代にはみられず、むしろ敗戦後のほうが関心は払われていた。たとえば、「日本の生活では最近まで従属的な役割しか果たしてこなかった女性達に、ようやく市民権が認められた」⁽¹¹⁶⁾ とか「女性の地位は、現在ではかつてほど従属的なものではない。しかし依然として男性が家族の中で主人である。外を歩く時は女性はいつも夫の何歩か後を歩く」という指摘がなされている⁽¹¹⁷⁾。戦後改革の中で浮上した女性の地位に関しては、高度経済成長期では余り顧慮されず、種々の社会矛盾に目をむけるようになった1970年代になって、再び考慮されるに至ったことを逆証しているといえるのではないだろうか。

おわりに

戦後の日本イメージは、ある意味では戦前にすでに形成されていた。欧米の模倣に始まる成長と海外への膨張・侵略に至る経緯、また西洋からみると“神秘的な”日本文化と生活様式は、「古き日本とヨーロッパの要素との混合」する「並存の国」に対する興味関心を増幅させてきた。そして、そのような並存状況それ自体が関心の対象であり、記述対象であった。戦後の叙述もまずこれら戦前の記述内容ならびに日本像を引き継ぐところから始まっている。

日本製品が海外市場に普及していくにつれ、次第に日本の経済社会状態への関心が強まっていく。成長する産業分野の具体的紹介も厚味を増していく。経済成長は低価格製品の輸出による海外市場席捲によって支えられているという単純な、換言すれば、戦前から引き続くステレオタイプの説明が1950年代から60年代にかけては多くみられた。そして、何故低価格

で生産できるかという問いかけに対しては、勤勉さや慎ましさに代表される日本の国民性にその理由が求められた。高度経済成長期に入って一層成長の度を増すと、驚異と脅威の感情が交錯しつつ、高い成長率の背景説明に関心が高まっていく。だがやはりその答えは、勤勉さに代表される日本の国民性・外国の模倣や文物の摂取・人口圧力による海外膨張（移民と侵略）という戦前からのイメージに基づくものであった。これと並行して、日本の生活習慣や日本の家屋を微細にわたり紹介する傾向もやはり色濃くみられる。その意味では、60年代までは戦前からのイメージの残像が大きかったといえよう。だが、この頃から「伝統と進歩」・西洋的なものと日本的なものとの並存状況の招来する矛盾は無視できなくなる。60年代前半あたりまでは、日本は伝統を維持し、西洋の文物や風俗習慣を融合しているという評価が主流であったが、次第に日本の伝統的生活様式や文物の消滅が注目されるようになる。「進歩」の側面が「伝統」の側面を圧倒しつつあると同時に、高度経済成長のより包括的な説明が必要となっていた。

1970年代に入ると、日本関連の叙述は60年代までのものとは一線を画し、全体として、経済社会的な側面からの分析が盛んになったといえよう。これはもともとドイツにおける社会史＝社会経済史の伝統とも無関係ではないだろう。だが、日本イメージという観点からみると、分析対象が“神秘的な日本人”から“ホモ・エコノミクスとしての日本人”に移行したといえることができるのではないだろうか。もっとも、当の日本人はこの時すでに「エコノミック・アニマル」と揶揄される存在になっていたのであるが。終身雇用で代表される労働慣行や企業観、生産効率向上のための設備投資、零細下請企業の存在、それらを背景とする低コスト生産、市場や援助を介しての東南アジアへの経済支配の関係、これらすべての上に成り立っている世界市場への進出——現在では日本の特質として余りにも有名なこれらの指摘が70年代になると一気に教科書記述に登場してきたことが、その移行を如実に物語っている。そして、1980年版の『地球を三周』が端的に示しているように、日本文化の紹介や生活様式などの叙述はほとんどみられ

なくなった。翻って考えれば、日本社会自体からその「伝統的」生活様式が消え去っていったのが70年代であったのかもしれない。そうだとすれば、記述されないという事実そのものに、日本の変容ぶりが看取されるということもよいだろう。事実、70年代は日本国内でもさまざまな側面で矛盾が顕在化してきた時期であり、戦後日本の転換期でもあった。その意味では、「もはや『戦後』ではない」という1956年度経済白書の余りにも有名な表現は⁽¹¹⁸⁾、むしろその20年後に当てはまるものであったのかもしれない。

なお、情報の遅れを考えれば、狂乱物価や石油危機、低成長や環境保護、市民運動など1970年代に進行していた日本の実態は、80年代以降の教科書に反映されるであろう。それについてはまた改めて検討することにしたい。

(注)

- (1) とりあえず簡便に鳥瞰できるものとして、正村公宏『図説戦後史』、筑摩書房（ちくま学芸文庫）、1993年、第13、16－19章；矢野恒太記念会編『数字でみる日本の100年』改訂第三版、国勢社、1994年。
- (2) ドイツ民主共和国でも第7・8学年でアジア・アフリカなど世界地理を学習する点は同様であった。たとえば、*Methodische Hinweise zum Lehrplan 1969*, Berlin: Volk und Wissen, 1969, S. 11を参照。ドイツ連邦共和国の例としては、*Die Schule in Nordrhein-Westfalen, Eine Schriftenreihe des Kultusministers Realschule, Richtlinien, Erdkunde*, Köln: Greven und Bechtold, 1978, S. 20を参照。
- (3) ドイツの学校制度については、とりあえず、望田幸男編『国際比較 近代中等教育の構造と機能』、名古屋大学出版会、1990年；荘司雅子監修『現代西洋教育史』、亜紀書房、1984年；ベリング著（望田幸男ほか訳）『歴史の中の教師たち』、ミネルヴァ書房、1987年；持田幸男『ドイツ・エリート養成の社会史——ギムナジウムとアビトゥーアの世界』、ミネルヴァ書房、1998年などを参照。
- (4) 「ドイツの教科書にみる近代日本像の変遷」『敬愛大学国際研究』第6号、2000年11月、91－126ページ。
- (5) B. Gündel, K. Gebauer, H. R. Maier (hrsg.), *Westermanns Erdkundliches Unterrichtswerk Für Höhere Lehranstalten, Bd.I. Vorstufe*, Hamburg: Georg Westermann, 1948.
- (6) a.a.O., S. 73-76.
- (7) *Erdkundliches Unterrichtswerk für höhere Lehranstalten Band 3. Die Ostfeste, des Erdkundlichen Unterrichtswerkes, herausgegeben von Dr. Robert Fox*, Verlag V. B. Teubner, Leipzig, 1931. In gekürzter Form veröffentlicht im Auftrage des Britischen Oberbefehlshabers, Hannover: Verlag W. Degener, 1947. 全184ページ中145－154ページが日本の記述に当てられている。
- (8) a.a.O., S. 151-152.
- (9) Julius Bocks, Dr. Hans Joachim Schoene, unter Mitarbeit von Hans Schülen, *Ein Blick in die Welt Erdkundliches Lese- und Übungsbuch Die außereuropäischen Erdteile*, B. Kühnle Verlag M. Gladbach, 1949. 全131ページ中102－107ページが日本の記述である。なお本書には、学校での使用を許可されている旨が明記されている。

- (10) a.a.O., S. 102–103.
- (11) a.a.O., S. 106–107.
- (12) Walter Böhme, *Offenburger Erdkundliches Unterrichtswerk ASIEN, Australien Ozeanien und die Weltmeere*, Offenburg/Baden: Lehrmittel-Verlag G. M. B. H., 1950. 全168ページのうち日本の記述は77–84ページである。
- (13) a.a.O., S. 79.
- (14) a.a.O., S. 80.
- (15) a.a.O., S. 81–82.
- (16) a.a.O., S. 83–84. 西洋からみると虚無僧には魅力を感じるところが多かったようで、たとえば日清戦争前後に日本を訪れているオーストリア人フィッシャーは「多くの巡礼の中でも、虚無僧ほど、魅力的な者はいない」と記している（アドルフ・フィッシャー『明治日本印象記』、講談社学術文庫、2001年、147ページ、原著は1897年刊行）。
- (17) Emil Hinrichs, *Erdkunde im 7.-8. Schuljahr, Die Erde*, Braunschweig-Berlin-Hamburg: Georg Westermann Verlag, 1953, 1955. いずれの版も263ページのうち88–92ページが日本の記述に当てられている。
- (18) a.a.O., S. 89–90.
- (19) Emil Hinrichs, *Erdkunde für höhere Schulen Asien, Australien, Neuseeland Der Große Ozean und seine Inseln Die Polargebiete Der Atlantische Ozean*, Frankfurt am Main und Bonn: Verlag Moritz Diesterwerf, 1951, 1952, 1957. 1951年版は全98ページ中45–50ページに、また1952年版は全110ページ中54–59ページに、1957年版は全125ページ中65–79ページに、それぞれ日本の記述がある。1957年版では、それまでの地震の亀裂の写真が富士山に差し替わっている。
- (20) *Erdkundliche Bilder Außer-Europa-Heft 4 Asien TeilIII Ost-, Inner-, und Nordasien*, Berlin-Hannover-Frankfurt Main: Pädagogischer Verlag Berthold Schulz, 1952, 1954, 1957. 日本関係の記述は、1952年版では全91ページ中42–61ページ、1954年版および1957年版では全90ページ中40–60ページ、となっている。
- (21) a.a.O., 1952, S. 54–58.
- (22) a.a.O., S. 56.
- (23) たとえば、Friedrich Beckmann, *Heimat und Ferne Heft 3: Aussereuropa*, 1960, S. 51に掲載されている。
- (24) *Erdkundliche Bilder Außer-Europa-Heft 4 Asien TeilIII Ost-, Inner-, und Nordasien*, 1952, S. 58–59.
- (25) たとえば、以下を参照。Friedrich Beckmann, *Heimat und Ferne Heft 3: Aussereuropa*, Oldenburg/Holstein und Hamburg: Matthiesen Verlag, 1954, 1960. 1954年版では全57ページ中49–51ページが、1960年版では全97ページ中50–52ページがそれぞれ日本の記述に当てられている。写真は若干変更されている。本文も1960年版のほうが簡略化されているが趣旨は同様である。*Erdkunde für höhere Leranstanlen 4. Band Ost-Europa, Asien Australien und Polynesien*, Bamberg: C. C. Buchners Verlag, 1953. 本書は全163ページ中99–104ページが日本の記述になっている。*Vaterland und Weite Welt*, Braunschweig: Westermann Verlag, 1954. 本書は全224ページ中142–146ページが日本の記述に当てられている。
- (26) *Geographische Weltkunde Lehr- und Arbeitsbuch für deutsche Schulen Die Staats- und Wirtschaftsräume der Erde Allgemeine Geographie, 2. Theil*, Karlsruhe: Badenia-Verlag, 1952. 本書は全176ページ中170–173ページが日本の記述である。なお1955年版では全171ページ中162–165ページが日本の記述で、若干の表現変更と統計数字を1952年のものに差し替えるなどの変更がみられる。
- (27) a.a.O., S. 173.
- (28) a.a.O., S. 171.
- (29) *Lehrheft der erdkunde für das 7. Schuljahr Australien, Ozeanien und die kapitalistischen Länder Asiens*,

- Berlin: Volk und Wissen Volkseigener Verlag, 1953. 全100ページのうち90—98ページに日本の記述がある。なお、前年に出された『第8学年用地理教本』(*Lehrheft der erdkunde für das 8. Schuljahr Die Asiatischen Länder Der Volksdemokratie*, Berlin: Volk und Wissen Volkseigener Verlag, 1952)では、全72ページ中50—59ページに朝鮮の記述があり、その中に日本帝国主義の植民地支配と収奪の状況が記されている。
- (30) a.a.O., S. 97—98.
- (31) a.a.O., S. 95—97.
- (32) C. Degn, E. Eggert (et al., hrsg.), *Seydlitz, 3. Teil: Heft C*, Kiel: Ferdinand Hirt, 1954. 全123ページ中97—105ページが日本の記述である。また、1959年版では広島市街の写真が削除されているほかは全体のページ数、日本記述の配当ページ数、本文の内容など全く変更がない。
- (33) a.a.O., S. 99.
- (34) a.a.O., S. 100.
- (35) a.a.O., S. 100—101.
- (36) a.a.O., S. 101—104.
- (37) a.a.O., S. 104
- (38) a.a.O., S. 105.
- (39) *Länder und Völker Erdkundliches Unterrichtswerk, 3 Die Ostfeste*, bearb. von Karl Heck, Stuttgart: Verlag von Ernst Klett, 1950, 1960. 日本に関する記述は、1950年版が全176ページ中128—134ページ、1960年版が全180ページ中130—135ページである。なお、1955年版もあるが、これは1950年版と全く同一である。
- (40) たとえば朝鮮の項目で朝鮮民族の顔の挿し絵が掲載されているが、これなどは明らかにハームズ (H. Harms, *Erdkunde in entwickelnder, anschaulicher Darstellung III. Band, I. Teil. Asien*, Lipzig: List & von Bressendorf, 1928, S. 223) に載っている写真から描いたものである。
- (41) a.a.O., 1960, S. 130—134.
- (42) a.a.O., 1960, S. 135.
- (43) a.a.O.
- (44) Emil Hinrichs, *Erdkunde für höhere Schulen Asien, Australien, Neuseeland Der Große Ozean und seine Inseln Die Polargebiete Der Atlantische Ozean*, Frankfurt am Main und Bonn: Verlag Moritz Diesterweg, 1959. 全152ページ中76—83ページが日本の記述に当てられている。
- (45) 「京都の神社」と題された写真には、寺の門前に人力車と虚無僧が写されている (a.a.O., S. 79.)。虚無僧については注 (16) も参照。
- (46) a.a.O., 1957, S. 70.
- (47) a.a.O., 1959, S. 82.
- (48) a.a.O., S. 83.
- (49) *Das ist unsere Erde Ein Buch zum Anschauen, Lesen und Arbeiten II. Band Europa und die Welt*, München: Bayerischer Schulbuch-Verlag, 1960, 1967. 1960・1967年版ともに全192ページ中159—163ページが日本の記述に当てられている。
- (50) a.a.O., S. 161.
- (51) Ludwig Bauer, *Erdkundliches Unterrichtswerk für höhere Lehranstalten Band IV Länderkunde von Asien und Australien*, Münchn-Düsseldorf: Verlag von R. Oldenbourg, 1960. 全178ページ中112—122ページが日本の記述である。
- (52) たとえば「日本の家での食事」と題された写真 (a.a.O., S.119) は、明治期ではないかと思しき裕福な家のそれである。
- (53) a.a.O., S.120—121.
- (54) a.a.O., S.121.

- (55) *Die Länder der Erde Arbeitsbuch für deutsche Schulen*, Frankfurt am Main: Hirschgraben-Verlag, 1960. 全160ページ中52—55ページが日本の記述である。本書には1965年版もあるが、ページ数・内容・写真とも全く同一である。また、茶畑の写真 (S. 53) は、パウアー前掲書 (Bauer, a.a.O., S. 121) を始め、他書でも多用されている。管見の限り、初出は前掲『土地と人々』1950年版 (*Länder und Völker*, a.a.O., 1950, S. 128) である。
- (56) *Lehrheft der Erdkunde für die 7. Klasse ASIEN Ost- und Südasien, Ausgabe 1960*, Berlin: Volk und Wissen Volkseigener Verlag, 1961. 全127ページ中84—93ページに日本の記述がある。
- (57) a.a.O., S. 88—91.
- (58) *Seydlitz, 3. Teil: Ostfeste Afrika, Asien, Australien*, Kiel & Hannover: Verlag Ferdinand Hirt, Hermann Schroedel Verlag KG Hannover, 1962, 1966. とともに全108ページで71—76ページが日本の記述に当てられている。なお、1954年版にあった「大日本帝国郵便」の20銭切手の写真は削除されている。
- (59) a.a.O., S. 73.
- (60) a.a.O., S. 76.
- (61) Emil Hinrichs, *Erdkunde für höhere Schulen Asien-Australien, Das Weltmeer, Die Polargebiete*, Frankfurt am Main-Berlin-Bonn-München: Verlag Moritz Diesterweg, 1965. 全144ページ中103—110ページが日本の記述に当てられている。
- (62) a.a.O., S. 105.
- (63) a.a.O., S. 105—106.
- (64) a.a.O., S. 107—108. 1960年のデータとして紹介されているのは、綿とスフの生産で世界第4位、イギリスよりも多くの載貨容積 (トン数) の船を建造、5,200万トンの石炭を採掘、という数字である。
- (65) *Erdkunde Asien Australien*, München: Blutenburg Verlag, 1965. 全158ページ中125—133ページが日本の記述である。
- (66) a.a.O., S. 131—132.
- (67) *Schäfer Erdkunde Asien Australien Ozeanien*, Paderborn: Ferdinand Schöningh, 1968. 全165ページ中136—147ページが日本の記述に当てられている。
- (68) a.a.O., S. 136—141.
- (69) a.a.O., S. 141—142.
- (70) a.a.O., S. 144—145.
- (71) a.a.O., S. 144.
- (72) a.a.O., S. 145.
- (73) *Schäfer Erdkunde Asien Australien Ozeanien*, Paderborn: Ferdinand Schöningh, 1970. 全156ページ中56—63ページが日本の記述である。なお、本書を簡略化したもの (一部写真も異なる) として *Erdkunde Die Ausereuropäischen Erdteile*, Ferdinand Schoeningh, Paderborn, 1970がある。こちらは全184ページ中132—137ページが日本の記述である。
- (74) a.a.O., S. 58. 推計値で東京の常住人口が1,000万人を突破して世界初の1,000万都市となったのは1962年である。
- (75) a.a.O., S. 59.
- (76) a.a.O., S. 62—63.
- (77) a.a.O., S. 63.
- (78) *Seydlitz für Gymnasien, Band 3A Afrika-Asien-Australien*, Kiel & Hannover: Verlag Ferdinand Hirt, Hermann Schroedel Verlag KG, 1972. 全112ページ中56—65ページが日本の記述に当てられている。なお、『ザイドリッツ』には各種の版がある。たとえば『ザイドリッツ／パウアー』は前節でも取り上げなかった。これには1963年版と1970年版 (*Seydlitz/Bauer, 4. Teil, Asien-Australien*, Kiel & Hannover: Verlag Ferdinand Hirt, Hermann Schroedel Verlag KG Hannover,

- 1963, 1970) があり、ともに全108ページ中71—76ページが日本の記述である。だが両者はごく一部の統計数字を除いて全く同一内容である上に、前節で取り上げた『ザイドリッツ』1962年版より若干叙述が簡略化されている。したがって、本論では取り上げなかった。
- (79) a.a.O., S. 58.
 - (80) a.a.O., S. 59.
 - (81) a.a.O.
 - (82) a.a.O.
 - (83) 正村、前掲書、321ページ、図表19-4。
 - (84) *Seydlitz für Gymnasien*, 1972, S. 60.
 - (85) a.a.O.
 - (86) a.a.O., S. 61-63.
 - (87) a.a.O., S. 64.
 - (88) a.a.O.
 - (89) *Der Mensch gestaltet die Erde, Erdkundebuch für die Sekundarstufe I von Manfred Bohle, Band 2*, unter mitarbeit von Martin Bohle und Friedrich-Karl Micheel, Frankfurt am Main: Hirschgraben-Verlag, 1973. 日本に関する記述は、第4章（全体で24ページ）の8—20ページにある。本書には1979年版もあるが全く同様である。
 - (90) a.a.O., S. 13/24-14/24.
 - (91) *Schäfer Erdkunde Die Erde als Wirtschaftsraum*, Paderborn: Ferdinand Schöningh, 1973. 全170ページ中155—160ページが日本の記述である。
 - (92) a.a.O., S. 156.
 - (93) a.a.O., S. 157.
 - (94) a.a.O., S. 158.
 - (95) a.a.O., S. 158-159.
 - (96) a.a.O., S. 159-160.
 - (97) a.a.O., S. 160.
 - (98) *Länder und Völker Erdkundliches Unterrichtswerk, Ausgabe B, 3 Afrika-Asien-Australien*, bearb. von Karl Heck (et al.), Stuttgart: Verlag von Ernst Klett, 1971. 日本に関する記述は、全96ページ中39—45ページである。なお、1961年版から写真が一部カラー化されている。1961年版では全100ページ中40—46ページが、1964年版では全98ページ中40—46ページが、それぞれ日本の記述に当てられている。しかし、一部の統計数字の差し替え以外は本文・写真とも1960年版と同じである。
 - (99) a.a.O., S. 39.
 - (100) a.a.O., S. 42. なお、農地の構成比率は、1965年=16%、1972年=15.2%、1975年=14.8%となっている（前掲『数字でみる日本の100年』、35ページ、表1-8「国土利用の変化」）。
 - (101) a.a.O., S. 44-45.
 - (102) a.a.O., S. 45.
 - (103) *Länder und Völker Erdkundliches Unterrichtswerk, Ausgabe B, 3 Afrika-Asien-Australien*, bearb. von Karl Heck (et al.), Stuttgart: Verlag von Ernst Klett, 1979, S. 45. なお、本書では全96ページ中39—45ページに日本の記述があり、本文・写真とも本論に掲げた末尾のほかは、わずかな修文上の違いがある以外同一である。
 - (104) *Dreimal um die Erde, Band 2, für das 7. Und 8. Schuljahr, Erdteile und Länder*, Berlin: Geographische Verlagsgesellschaft, Velhagen & Klasing und Hermann Schroedel, 1970, 1975, 1980. 日本に関する記述は、1970年版では全224ページ中195—199ページに、1975年版と1980年版では全224ページ中105—115ページにある。なお、本書の第5・6学年用が1973年に出されており（*Dreimal um die Erde, Band 1, für das 5. Und 6. Schuljahr, Erdkundliche Einzelbilder*,

- Berlin: Geographische Verlagsgesellschaft, Velhagen & Klasing und Hermann Schroedel, 1973)、全166ページ中137—138ページに都市としての東京を紹介する記述がある。内容は第7・8学年用から抜粋簡略化したものである。
- (105) a.a.O., S.195-196. なお、この「緑藻類」については1975年版では記述が削除されており、1980年版になって、鹿児島での海苔養殖の写真を参照させつつ、「簡単な方法で献立表を内容豊かにするために、沿岸の住民は海から緑藻類を採っている」と記述している (a.a.O., 1980, S. 111.)。
- (106) a.a.O., S. 197-199.
- (107) a.a.O., 1975, S. 105-106.
- (108) a.a.O., S. 107-111.
- (109) a.a.O., S. 111-115.
- (110) 田中角栄『日本列島改造論』、日刊工業新聞社、1972年。日本列島改造論に対しては野党各党も直ちに批判を展開した（読売新聞社編『日本列島改造論批判』、読売新聞社、1972年、日本社会党・公明党・民社党・日本共産党の批判を載せている）。
- (111) *Dreimal um die Erde, Band 2*, 1980, S. 105.
- (112) a.a.O., S. 106.
- (113) a.a.O., S. 107-111.
- (114) a.a.O., S. 112-115.
- (115) *Dreimal um die Erde*, 1975, S. 108.
- (116) Böhme, a.a.O., 1950, S. 84.
- (117) *Erdkundliche Bilder Außer-Europa-Heft 4*, 1952, S. 56. このほかにも家庭での女性の状況などについて具体的に記述されている。
- (118) 経済企画庁編『昭和31年度経済白書——日本経済の自立と近代化』、至誠堂、1957年、42ページ。